蘇民将来

西海英雄

1994/3

始　め　に

「蘇民将来」は，木を刻んだお守りである。北は，岩手の黒石寺から南は京都の八坂神社までいくつも見いだされる。１０年も前の家族旅行の途中，上田の信濃国分寺でそのお守りのポスターを見つけ，蒙古のパオを連想させるその異国的な形に魅入られた。昨年の 1993 年 1 月，そのお守りを手に入れてから今日までの 15 カ月間, 興味を持って蘇民将来に関係のある神社仏閣を訪れた。その結果，いろいろなことがわかってきた。それらを商業ネットワークの 1 つである PC-VAN の REKISI(歴史)フォーラムにも投稿し,教えて頂いた。

一体,「蘇」の「民」の「将来」とは何なのか？　その中でも「蘇」とは何なのか？広辞苑には，「よみがえる」と記されているにすぎない。蘇武などの名が中国にあるからそれなりの好い感じではあろうが。信濃国分寺の蘇民将来のお守りには，蘇民将来之子孫也と記されている。国分寺が関係しているとすれば，それは奈良時代で８世紀であったろう。それならば，蘇我氏の蘇かも知れない，と思った。

しかし，昨年の 10 月に百済の最後の都の扶餘を訪れたときその城を「扶蘇山城」と呼ぶことを知った。この「蘇」は，亡命百済人に関係しているのではないか。そして渡来人の神社，京都八坂神社でそのことを確信した。そこには，蘇民将来社（百済系），白鬚神社（高句麗系），そして大国主命（鳥取，島根）の３社が接して建てられている。彼等は，同胞なのである。

さらに目を北に向けると北は，北海道，秋田から南は，富山にかけていわゆるアイヌ系(?)の蝦夷とは異なる渡来人がいることが知られている。彼等は，百済の支配層，高句麗，新しくは渤海などと同じ民族でツングース系の人々だと言われる。平泉の藤原氏もその体型からツングース系との説がある。つい，渡来人と言うと南から北へと考えがちだが，日本海を自分達の庭として古くから行き来していたツングース系の人々にとっては同じ民族の円弧の上の移動に過ぎず，南に行くことも，北に行くことも特に困難は感じなかったであろうと推測される。大和朝廷にとって彼らは，時に戦いを交える異民族であり，時に優秀な外国人労働者であったが，唯一，八坂造だけが両方に話しのできる存在であったと推測される。京都八坂神社は，渡来ツングース族の日本における総支社の役目をおっていたのではなかろうか。そして黒石寺を始めとする一群の寺社はその支社であったろうか。

まだまだ，興味は，尽きないが，蘇民将来に関わり合って１年余り。PC-VAN でご教示頂いた方々，あるいは，貴重な資料をいただいた方々，そして突然降って湧いたような私の趣味につき合って頂いた方々に中間報告をしたくなった。本来ならば，もっと整理して説得力豊かにしたかったが，それを待ってもいられない忙しい状況にある。とりあえず，PC-VAN に投稿した分（「蘇民将来 No.1～9」）をそれに対するコメント，および資料を参考にしながらお読みいただければ幸である。

94/03/19 西海英雄

蘇　民　将　来　　目　次

1. 上田国分寺の蘇民将来　--外国人労働者の特赦--　3
蕪民将来符のいわれ　(八日堂祭護符)　4
いらっしゃいませ＞西海さん　「蘇民将来」について　影丸　6
ＲＥ：蘇民将来について　アコ（８０行）　9
西海英雄さん、いらっしゃいませ／アコ　11
なるほど，蘇民将来＞西海さん　／Ａ．Ｄ．Ｘ　12
3. 笹野観音　1993.9.　13
4. 京都・祇園　八坂神社の蘇民将来守　1993.10.　16
八坂神社＝蘇民将来の本家、外国人の拠り所（考察）　17
5. 下諏訪の津島神社と尾張国津島神社　19
西海英雄さん貴重なレポートどうも［そんし］　20
尾張国の津島神社について　影丸　20
６．蕪民将来は、百済・高句麗滅亡で来日した難民の救済令か　23
7.　環日本海文化圏と八坂神社　25

資料 (略)

・＜八切＞「日本意外史」エビスとは何なのか　影丸
・蘇民将来のビデオ出力（京都八坂神社、上田国分寺、愛知津島神社、米沢笹野観音）
・写真参照
京都八坂神社の蘇民将来、白鬚神社、子安社
岩手黒石寺、米沢笹野観音観音橋の擬宝珠
・新聞資料、「百済王族」1300 年ぶり里帰り!?
・小林久三、「海を渡ってきた異色民族、粛慎、靺鞨、狄」,p.38-42,歴史 Eye,1993.10.

1. 上田国分寺の蘇民将来　　-- 蘇民将来についての勝手な推測 --外国人労働者の特赦--

信越本線上田駅からバスで少し行ったところに「国分寺」があります。古びたお寺ですが、もともとの信濃国分寺は信越線の線路によって分断され、現在はそこに立派な博物館が建っています。そこから数百メートルも行かないところに現在の国分寺があります。もう１０年も前にたまたまドライブで立ち寄ったことがあります。そこで大変衝撃的なお守りの写真を見つけました（ビデオ出力参照)。木製で６角形、上の方はくびれ、頂上は６角形の屋根状になっているのです。まあ、六角堂と言うところでしょうか。そこに、漢字で蘇民将来云々と書かれ、さらにその飾りとして赤と黒で線模様が描かれています。この模様が、どうみても日本的な感じがしません。直感的には、農と言うよりは牧の世界で、このお守りも蒙古のパオを象ったと考えると理解できそうです。そのときは、このお守りをいつかは手に入れたいなと思いつつ、つぎの目的地へ向かったのでした。

そのつもりで見ていると、蘇民将来に縁のある場所は日本中にあるようです。１月の駅のポスターには岩手県水沢の黒石寺の裸祭りの奇祭があります。これも蘇民将来が関係していると聞いたことがあります（蘇民将来 No.2 参照)。

平成３年の夏、米沢に行ったときに少し時間があったので、鶏の一刀彫で知られる笹野観音に寄ってみました。藁葺の重厚な屋根に大きな表情豊かな鬼瓦が睨んでいる素晴らしいお堂でしたが、そこも蘇民将来に関係しています。ただ、道端の由来書きによると、２人の兄弟がいたが、そこへ老人が一夜の宿を頼んだ。兄は断り、弟が泊めてやった。老人は実は神で、兄が亡び、弟が長者となり栄えた、と言うような内容だったと覚えています。どうも、記憶が不確かなのが残念ですが、泊めてやって、後日神が北の方から攻めてきて兄を滅ぼし、弟が長者になったと言うのだったかも知れません（蘇民将来 No.3 参照)。

そして、去年の正月、遂に、憧れの蘇民将来のお守りを手に入れました（ビデオ出力参照)。１月７日に菅平からのスキーの帰り、時間を作り、先に訪れた上田の国分寺の縁日に行くことが出来ました。白い山々が徐々に黒いシルエットに変わっていく中を、足元の雪に気をつけながら、人並みの間を、凍るような白い息を吐きながら夜店の灯りから灯りを伝って本堂へ急ぎました。こうして手に入れたのは、予想よりもずっと小さな高さ約 11 ㎝、大径 4.5 ㎝の６角柱のお守りです。由来書きもその時もらったのですが、どこかへ紛れてしまいました（蘇民将来 No.8 参照)。角柱の６面には、各面に２字づつ記され、続けると「大福長者蕪民将来子孫人也」と読めます。蕪の字は、禾と魚の位置は現代と逆であるがどちらでもいいと案内に書いてあった。これからは、私の予想の蒙古の騎馬民族に関係のあるキーワードは出てきません。大福長者の由来は、笹野観音の由来書きと同じでした。違うのはその神様が、仏教の仏様の化身だったように思われます。

由来書きを記録するとか、資料を保存するとかしておけば良かったなと後悔しているときに、安田識人という方の監修で、愛知の郷土玩具津島神社の蘇民将来と題した由来書を手に入れることができました。参考までに、転写します。

日本二大天王社として全国に数多くの分社を持つ津島神社にまつわる信仰玩具である。門戸に「蘇民将来之子孫也」の文字を掲げよと教えた神（スサノオノミコト）の説話から生まれ、禍を除き福を与えるというので、この信仰は各地に分布し、今日も盛んである。

これには、長者伝説は無いようです。由来書には、写真も出ていて６角柱の外観は、上田の

国分寺とほぼ同じです（ビデオ出力参照)。違うのは、文字が黒で、模様は全て朱で書かれていることなどです。

蘇民将来に関する古文書で一番古いのは、上田の国分寺の書で、奈良時代（国分寺に伝わるとすれば確かに理解できる）と言われている。これらの資料から私は、次のように推測しました。

大福長者伝説は後世になって付け加えられたと解釈し、肝心なのは「蘇民将来子孫人也」にある。これを素直に読めば良いのではないか。権勢を誇った蘇我氏が 645 年、大化の改新で亡び、たくさん居たであろう蘇我氏に関係した民はたちまち圧迫され、地位を追われたに違いない。新興の蘇我氏は大陸から仏教を導入したが、それは一例に過ぎず、大陸の先進技術、難民を積極的に受け入れ日本中に移住させたであろう。当時、戦いの最前線であった東北地方へも蘇我氏の影響を受けた人々、特に技術的には先進であった大陸系の移民は、大量に居たに違いない。水沢のような大和朝廷から見れば辺地にも蘇民将来があるのはそのためであろう。蘇我氏の一族の主だった人々は処刑され、抹殺されたであろう。しかし、大陸からの外国人労働者は、蘇我氏に利用されただけという観点から処刑は免れた。しかし、圧迫は免れず、半世紀以上に渡り悲惨な目にあっていた。それが、奈良時代になって、罪にあった外国人労働者が、その文化的高さ、技術力保護のため特赦にあった。その公文書が、蘇民将来の文言ではなかろうか。和風でなく大陸風の６角形のお守りは、出身が大陸だと言うことを暗示している。

勝手な推測ですが、蘇民将来については研究もされているような気がします。お教えいただければ幸です。

1993/01/24　　西海英雄　DHG86015

通常は、NIFTY のパソコンや国際関係のフォーラムをいい加減に飛び歩いていますが歴史関係はない（多分）ので、残念に思っていました。今回、PC-VAN で歴史フォーラムを見つけ、録にコマンドも良くわからないのにアップロードしました。宜しくお願いします。.
古代史】蘇民将来　No.8 上田国分寺

★蕪民将来符のいわれ
大学時代の友人五十嵐昭君より上田国分寺八日堂祭で得た蘇民将来のお守りの護符を
得た。以下に写す。この八日堂が、八坂神社のキーワードの影響を受けているかどうか
は不明であるが、興味深い。お守りについてはビデオ出力参照。　1994/01/31

蕪民将来符のいわれ
天平１３年（７４１）聖武天皇の勅願によって国土安穏のため創建された当信濃国分寺八日堂で、古来授けているのが蕪民将来の護符である。[蕪の禾と魚の位置は逆になっているが、蘇と同字]

蕪民将来という情け深い者が巨丹（こたん）長者に宿をことわられた旅人を厚く遇し、その言葉にしたがい柳の木に「蕪民将来子孫人也」と書き、これを携帯し門戸にかかげて、その子々孫々が災厄をまぬがれ繁栄したという説話による。

この旅人は薬師如来の化身である牛頭（ごず）天王であって、奈良時代からこの信仰が広くひろ

まり薬師如来や牛頭天王をまつった各地の社寺では「蕪民将来子孫門戸也」と書いた紙切れや板の御守りなどを出されたが、現在まで伝わっているものは極めて少なく当寺のものが最も著名である。それは当寺に文明１２年（１４８０）「牛頭天王祭文」と称する蕪民将来縁起の古写本が保存されていること、六角形の形状や墨と朱の図柄が郷土美術として格調が高いこと、農民美術発祥の地である当地の農民が参与していること、さらに正月の開運招福を祈る「大福長者」が書かれることなどであろう。

正月七日八日の縁日には、遠近の参詣者がこれを求め帰り門戸にかけ、屋内の棚に安置し、或いは懐中に携帯して、除災開運を祈願したのが当地方の古くからの伝承で、まことに「国泰・人楽・災除・福至」のための国分寺建立の詔にふさわしい霊符である。

上田市国分
信濃国分寺　八　日　堂

8505　93/ 1/25　歓迎】いらっしゃいませ＞西海さん　「蘇民将来」について　影丸
8504　93/ 1/25　古代史】ＲＥ：蘇民将来について　　アコ（８０行）
8503　93/ 1/25　歓迎】西海英雄さん、いらっしゃいませ／アコ
8502　93/ 1/25　古代史】歓迎》なるほど，蘇民将来＞西海さん　　／Ａ．Ｄ．Ｘ
8501　93/ 1/24　古代史＆若葉】蘇民将来についての勝手な推測　---外国人労

#8505/8512　日本史ボード
★タイトル（PQA43495）　93/ 1/25　22:58　(109)
歓迎】いらっしゃいませ＞西海さん　「蘇民将来」について　影丸
★内容
　はじめまして　西海さん。
いきなり「蘇民将来」のタイトルが目に飛び込んできてびっくりしてしまいました。
しかも、蘇我氏と関連づけをなさってるんで二度びっくり。
　というのも、私が影響を受けた八切止夫という作家も、ちょっとニュアンスが違いますが蘇我氏と蘇民将来について関連づけて書き残しているからです。この方の説はかなり異端ですが、かといってバッサリと切り棄て難い魅力を多分に含んでいますので、私なんぞが紹介に努めているのですが‥‥
彼の著書「野史辞典」より「蘇民」を引用しますと（[] 内は私の補記)、

「平泉や八坂［京都の八坂神社］ら各地の松下神社では『蘇民将来之子孫也』と、柳の幹に書いた身分証明書を出し、また、各地の松尾神社では『蘇民将来、来福之守』の御札をば出す。六世紀に神奈川県曽我川畔に栄えた騎馬民族の末裔。［大化の改新後］滅ぼされたが、各地に同族が散布。やがて［源氏＝蘇我系騎馬民族？の］文治革命。のち白旗党余類と扱われ、江戸期になっても各小屋の初春の狂言には「曽我もの」をだす［「曽我兄弟」のこと］」

　次に「松下神社」という項目には次のようにあります。
「平泉と伊勢二見が浦の他にも、全国各地にあって＜蘇民将来子孫之人也＞や＜蘇民将来・来福之守＞の護符を氏子には出して、現在は精肉や製革業などの守護神。‥‥
以下略」
どうやら、革や肉を扱う人々の信仰を集めていたようです。
　こんなことから八切氏は、日本書紀の『大化の改新』について、「一書に曰く」としてある「韓人、鞍作りを殺す」（←うろ覚え、）という文章から、蘇我氏が革作と蔑称されていたとして、ここに蘇我氏に代表される騎馬民族系（江上氏の説く「騎馬民族」とは異なる）が体制から追われ、やがて時代を経て、「四つ系・騎馬民族」の多い関東・江戸では新春恒例の歌舞伎「曽我兄弟の仇討ち」というものを以って蘇我氏の仇討ちを象徴させたものだといいます。
　最近の発掘調査の結果から大化の改新そのものを疑う説もあり、書紀にある描写どおりにクーデターが遂行されたとは限らないですね。しかし、いずれにしても蘇我氏は体制から追われたという事でしょうか。そして、当然の如くそれまでの蘇我邸の史書は抹殺されたのでしょう。

ただ、通説では蘇我氏というのは物部氏に対抗した親仏教派で、八切氏の説く「原住民＝神を奉じる民」という対比からすると矛盾していると思われます。それとも、書紀作者に勝手に親仏派にされてしまったのでしょうか‥‥

西海さんの説かれる、蘇我氏が積極的に受け入れたであろう「外国人労働者たちに対する特赦としての蘇民将来の護符という説は興味ある発想だとおもいます。

私の場合は、八切氏の「蘇我氏＝革作り＝いわゆる『四つ』の騎馬民族系」説よりも、「蘇民」という漢語が、スメル山の漢語訳「蘇民（すめ)・須彌（すめ)・蘇迷盧（すめる)」の一つであるという説の方が興味があります。

「十六菊花紋の謎」(岩田明著　潮文社刊　１９９２年第五刷版)

という本にあるのですが、このスメル山というのは、中国・新疆ウィグル自治区南部カシュガルの南東方４３２キロに位置する旧都名「コタン」の里（現在は「ホータン）にある「カイラーサ山（現在ではカンリポチェ山、標高９０６０メートル」ということです。

しかも、町の南西部にある「ゴーシュリンガ（牛頭山)」という小山は、玄奘三蔵法師も記述した聖地で、ここに「コーマリ（牛頭窟)」と呼ばれる美しい大石窟があるといい、韓国・慶州の吐含山（とあむさん）にある「ソシモリ（牛頭里)」と対比してみると面白いかも。

高楠順次郎氏（慶応２年～昭和２０年）は「知識民族としてのスメル族」という論文にて、スメル文化とインダス文明との対比、民族性、宗教観について研究を発表し、結論として、このコタンの里がスメル民族の発祥の地であるとしているとの事。

私はまだその原書を読んでませんが、歴史上謎が多いとされる英語読み「シュメール」人‥‥我々日本語と同じ膠着系言語を用い、髪も眼の色も黒い‥‥彼らがアジア系であることは大いに納得できます。

ハーバード大学の碑文学紀要にて、エセル・Ｇ・スチュワートが、

「アパッチ族およびその他の種族の祖先はコタンより来た」

という論文を発表しているそうですが、コタンとしてでも、スメル人としてでもアメリカ大陸へ渡ったのではと、私なんかは愚考しております。現に彼らはモンゴロイドで、白人よりも我々日本人と近い関係にあるのです。わたしゃ、今のアメリカの頽廃は自業自得とメイソンの画策と殺されたインディアン達の怨みに原因があるのではとマジで考えてます。オカルトっぽいですが^^;　ワシントン政府はインディアンの怨霊を静めるために天満宮を要所に建立すべきでしょう。

おっと、話が外れてしまいましたが、

岩田氏は、このコタンの民の流れを以下のように系統分けてしてます。

１　もっとも遠くに進出したメソポタミアのスメル族

２　印度の西部アパランタ地方に進出したスメル系バラタ族。スメル月氏系・プロ族　　、日氏系、クル釈迦族

３　さらに、印度から移住したインドネシア族、ポリネシア族、オセアニア族　　※モン・クメル語のクメル（ｋｕ-ｍｅｒ）は、スメルに対応する言葉で、これは「地上のメル族」を意味している。

高楠順次郎氏編纂の漢語訳「大蔵経」の五十四巻「慧琳（えりん）音義」に崑崙

語を話す部族として「僧祇（さんぎ)、突彌（とみ)、骨堂（こたん)、閣蔑（こうめい）の四部族があるという。この閣蔑が日本へ渡来し、「久米」などに 転じたかもしれない。

そういえば、牛頭天王とスサノオノ命を祀る京都八坂祇園神社は韓国が発祥とされているようですが、そこでも「蘇民将来子孫也」と木に書いた多角形の護符を売っていました。実物は八切先生にさしあげたので何角形だか覚えていないんですが、多分六角形だったと思います。今でも売ってる筈です。私はこの六角形からつい「篭目紋,ソロモンの印章」を想像してしまいますが。

岩田氏は、「備後国風土記」にある話（下記）を引いて、

「疫病神扱いのスサノオ別名牛頭天王が南海に旅をして飢えた際､『巨旦将来（こたんしょうらい)」という金持ちに宿を頼むが拒絶されてしまう。しかし兄の「蘇民将来」は貧しいにもかかわらず藁の蒲団と粟飯をご馳走する。その礼にと『護符』を与え、『疫病が流行っても、これを持つ者は助かる」と告げて去って行く」

この「巨旦」とは閣蔑族の同族である骨堂（こたん）族で、「蘇民」とは大蔵経の「慧琳音義」によれば「スメ」と読み、中央アジアを発祥の地とするスメル一族の呼び名であると記されています。私はまだ原典は読んでませんが‥‥

その他にもこの本にある情報は面白く、まだ出たばかりで入手可能ですので御一読をおすすめします。

要するに、「蘇民」とは、八切氏によれば蘇我氏の末裔であり、それは沿海州など北から裏日本を経て渡来した、白色を民族カラーとする騎馬民族系の民であり、それに対して岩田氏などの「蘇民＝スメル」という観点に立てば、彼らは南方から稲作や漁・航海法を伝えたインドネシア、ポリネシア系の人々だという事になるのでしょうか。北と南じゃ随分違っててどちらが真実に近いのか迷ってしまいますが、両方正しいという気もします。

「蘇民将来」は日本原住民史とも関連して興味ある分野なので、もっと学習して色々知りたいと思います。今は急いで書いてますんで、この程度で御勘弁を。

西海さん、もし他にも御存じの情報がありましたら、是非このボードに書き込みをお願いしますね(^_^)

それにしても、交通手段が発達した現代社会に生きる我々が古代民に対して想像する以上に、部族の移動というものは激しかったようですね。

ｐ．ｓ．

ニフティにも歴史フォーラムはあるようです。ためしに「go frekishi」などとタイプしてみて下さい。

な〜んて、ＰＣ－ＶＡＮのボードで言っておこられたりして‥‥

#8504/8512　日本史ボード
★タイトル（FHJ55492）　93/ 1/25　21:19　（ 80）
古代史】ＲＥ：蘇民将来について　　アコ（８０行）
★内容
　とりあえず、【古代史】としておきまする。

　西海英雄さんの＃８５０１を踏まえて、蘇民将来について少々フォローしませう。先ず、辞書を引いてみると‥‥

そみん　しょうらい　ｼﾔｳﾗｲ【蘇民将来】［4］［1］
　（1）疫病よけの神の名。貧乏だったが、神に宿を貸したお礼に茅(ﾁ)の輪を作って疫病から免れる方法を教えられたという（備後風土記）。
　（2）災厄を除いて福徳を祈る護符の一。六角または八角の棒や木札・紙札などの 形状がある。「大福長者蘇民将来子孫人也」などの語を記す。毎年正月、寺社で発 行する。〔ＥＢ『大辞林』〕

そみん - しょうらい【蘇民将来】‥ｼﾔｳ‥
⑴疫病除けの神の名。備後風土記に、茅(ﾁ)の輪を腰に着けて疫病を免れた説話を伝えている。
⑵護符の一。木製の六角または八角で塔状をなすものや守札があり、「大福長者蘇民将来子孫人也」などと記す。八坂神社末社や長野県上田市国分寺の八日堂をは じめ諸国寺院から出す。〔ＥＢ『広辞苑』第四版〕

といった具合で、西海英雄さんが解説された護符とは別に「蘇民将来」という名の神様がいたことがわかります。

　では、どちらが古形かというと、辞書が掲げている順をみると神様のほうが古いと考えられているようですね。なお、この神様は『備後国風土記』（厳密に言えば、『釈日本紀』巻七・述義三・神代上「素戔嗚尊乞宿於衆神」項に引用されているもので、実物は現存しない）といいますから、和銅６年（７１３）～天平１１年（７３９）には既にあった説話のようです。

　で、『備後国風土記』にあったとされる説話とは、‥‥

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
　備後の国の風土記にいう、――疫隅（えのくま）の国社（くにつやしろ）。(注 74)
昔、北の海においでになった武塔（むたふ）の神(注 75)が、南の海の神の女子を与波比（よばひ；求婚）に出ていかれたところが、日が暮れた。その所に将来兄弟の二人が住んでいた。兄の蘇民将来はひどく貧しく、弟の将来は富み、家と倉が一百あった。ここに武塔の神は宿を借りたが、惜しんで借さなかった。兄の蘇民将来はお借し申しあげた。そして粟柄（あわがら；粟の茎）をもって御座所を

造り、粟飯などをもって饗応した。さて終わってお出ましになり、数年たって八柱の子供をつれて還って来て仰せられて、「私は将来にお返しをしよう。お前の子孫はこの家に在宅しているか」と問うた。蘇民将来は答えて申しあげた。「私の娘とこの妻がおります」と。そこで仰せられるには、「茅の輪を腰の上に着けさせよ」と。そこで仰せのままに〔腰に茅の輪を〕着けさせた。その夜、蘇民の女の子一人をのこして、全部ことごとく殺しほろぼしてしまった。そこで仰せられて、「私は速須佐雄（はやすさのを）の神である。後の世に疫病がはやったら、蘇民将来の子孫だといって、茅の輪を腰に着けた人は免れるであろう」といった。

東洋文庫版『風土記』p325（「風土記逸文」）

＝＝

注 74：広島県芦品郡新市町戸手の江能にある疫隅神社とされる。

注 75：「秘密心点如意蔵王陀羅経」の武塔天神王から出たとする説、あるいは朝鮮の巫女（ムーダン）の神とする説などもあるが不明。福慈筑波型の祖神巡行説話に道教や陰陽説が混交されている。なお『釈日本紀』はこの話に注して「先師がいうには、これすなわち祇園社の本縁である」といっている。(p364 一部略)

といったもので、後世の文献では、弟を巨旦将来（こたんしょうらい）と名づけています。

ちなみに、影丸さんが紹介された八切止夫氏の著作を見ると、蘇民を日本列島の原住民（＃８０８３他)、蘇我氏の末裔（＃７７４９)、北方騎馬民族（＃８３３３）などと解釈しているようですね。ただ、護符に「大福長者蘇民将来子孫人也」などと漢字で書いているところをみると、原住民系とするよりは渡来系と考える方がスッキリしそう。それから、私の場合、「蘇」だと「蘇我氏」よりも蘇州（中国江蘇省南部の都市）の方が先に浮かんできてしまいますが‥‥。

ところで、「正月」＆「木片の護符」というキーワードから、スルドイ方は以下のやり取りと思い出されたことでしょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

しかし、それを各地に伝えた担い手が誰であったのか？という点については案がない(^_^;)

ＦＨＪ５５４９２　　アコ

#8503/8512　日本史ボード
★タイトル (FHJ55492)　93/ 1/25　21:16　(11)
歓迎】西海英雄さん、いらっしゃいませ／アコ
★内容
　「蘇民将来」と称するものには２系統あるようなのですが、両者がどうして同名なのか私も詳しくは知りません。で、ご参考にでもと思い、おおざっぱな話を次のＭＳＧにまとめておきましたので、ついでに読んでネ。

　ということで、ＮＩＦとＶＡＮとでは、勝手がだいぶ違うでしょうが、ドンドン書き込んで下さいネ。これからもよろしく。

　それから、ＮＩＦにもＦＲＥＫＩＳＨＩというフォーラムがあります（私もＲＯＭの一人)。

ＦＨＪ５５４９２　　アコ

#8502/8512　日本史ボード
★タイトル（BGF01931）　93/ 1/25　21:10　（ 28）
古代史】歓迎》なるほど，蘇民将来＞西海さん　　／Ａ．Ｄ．Ｘ
★内容
古代史】歓迎》なるほど，蘇民将来＞西海さん　Ｒｅ＃８５０１／Ａ．Ｄ．Ｘ．

　＃８５０１の　なかなか面白い発想のＭＳＧを　どうも　ありがとうです。
蘇民将来の「蘇」を，古代の豪族の蘇我氏と関連されたのは，面白いと思いました。正統な？学界で　蘇民将来がどのように評価されているのか？，蘇民将来のモチーフが，古代史】レベルまで遡及しうるのか？，全く知りませんが，多分，アカデミズムでも，詳細は不明だと思うので，西海さんのような試論も有意義だと思いますよ。

　「蘇民将来子孫人也☆」などと，文末に，晴明判＝つまり，破軍星の添加されたものもあるとのことなので，陰陽師や修験者が，この蘇民将来信仰の伝搬に関与していると考えられているようですね？。つまり，少なくとも，中世】レベルまでは遡及しうるのでしょう。

　一方，『備後国風土記』逸文に，武塔神（この神＝スサノオと考えているようだ）と，悪意の兄（＝コタン将来）と善意の弟（＝蘇民将来）との出合いというモチーフで，登場するようですが，武塔神というのを，スサノオと切り放して考慮すると，また，違う世界が見えてくりのかも？。

　武塔神＝フト神とか読むと，フト＝仏教の古代での蔑称？　かなぁあ？？？。尾張の津島神社となると，織田信長の祖父の代からの縁の神社であり，八切止夫史観なら，＜神徒＞系の信仰のはずだが？？？。

　なお，蘇民将来・・には，八角形のものもあるとかで，　古代史】では，八角形＝天皇の専有・・との　発想もあり，興味は尽きません。

　西海さんも，また，新たな御発見があれば，また，教えてくださいね！。

古代史は　よく知らない・・・　　Ａ．Ｄ．Ｘ．

2. 黒石寺　　1993.7.

★仕事の途中東北新幹線の江刺水沢駅に降りた。生憎の雨の中をタクシーをとばして一応黒石寺に行きはしたが、案内を頼む程の時間に余裕がなくさっと御堂を拝観しただけであった。川から山へ続く斜面に建っているお寺で、お堂は大きいが、手入れが必要な感じがした。近くには、日本一の茅葺きの本堂を持つ曹洞宗の正法寺があり、かってはこの街道沿いは栄えていたのではないかと想像させられた。

江刺水沢の駅のパンフレットによると、黒石寺は、天平元年（７２９）行基菩薩の開祖という。近くの石手堰（いわてい）神社は坂上田村麻呂が築いた胆沢城（８０２）の式内社であるが、その別当寺として栄えた古いお寺で、盛時には４８の堂塔伽藍あったという。そのご本尊薬師如来（重要文化財）の厳しい姿は、蝦夷（えみし）降伏の辺境の祈りがこめられているようである。墨書きの胎内銘により貞観４年（８６２）１２月の造顕であったことが分かるが、その銘文には、額田部、保積部、宇治部、物部の４氏の名が誌されている。蘇我氏と争った物部氏の名前が見られるのが興味深い。もし、蘇
我氏に関係した民が居たならば、彼等は、圧迫されたであろう。寺自身は、天台宗から、密教の山伏の寺と変って行き、旧正月８日の蘇民祭も別当登り、鬼子登り（護摩，蘇民袋争奪というように変質し、独特の祭となったのであろう。

★駅に蘇民将来のお守りが飾ってあった（写真参照）。六角柱で白木、くびれはあるが、頂上は平。柱には蘇民将来・・の金石文字。１面に２字づつ書いてある。大変に好感が持てたたが、お守りというよりはコケシに見え、観光用にイメージだけを伝えているかも知れない。是非とも本物を手に入れたい。

コケシは何かのお守りだなんて昔、聞いたことがある。この蘇民将来のお守りを見ていると同じ発想法によることが理解される。

★パンフレットの表紙が面白い。金石文字で「蘇民将来子孫門戸☆」と記されている（写真参照）☆は一筆書きで描くので、中が抜けているわけではない。中心に・が打ってあり、これを也（なり）と読むのだそうだ。ピリオドの役目であろうが、何かのおまじないなのかも知れない。

★なお、江刺市内の伊手熊野神社には正月１４日から翌朝にかけて行われる伊手蘇民祭があり、４００年以上の伝統があるとのことである。内容は黒石寺とほぼ同じである。

1993/10/17　　西海英雄　DHG86015

3. 笹野観音　　1993.9.

★米沢市笹野観音　観音橋復元由来を複写する機会を得た。以下に記す。

蘇民将来の由来記

慶長７年壬寅(1601 年)別当幸徳院住職印厳海の観音記(伝云無疫病振古毎年彫刻蘇民将来出之故之)に記録され、また釈日本紀、備後風土記逸文に蘇民将来の伝記がある。

昔北海の武塔神が南海の神の女に逢いに旅立たれた折その地に蘇民、将来という兄弟がいました。兄の蘇民は貧しく、弟の将来は富んでいました。ある日の夕方、武塔神が宿を乞うと弟は拒絶しましたが、兄は歓迎し、粟稈を席とし饗応した。その後８年を経て武塔神は８人の御子を連れて一夜の誼に報いんと兄蘇民の一家に茅の輪を作って帯締めたところその年に疫病が大いに流行し蘇民一家を残して他は滅亡した。後世疫病のあるときは蘇民将来の子孫といい茅の輪をもって腰上に帯すれば難を免れるなりと告げ給う云々と蘇民将来の伝説は「公事根源」にも記されている。疫病除け、邪鬼を退散せしむる護符武塔神は別に牛頭天王とも云う。

笹野観音別当幸徳院では毎年正月７日より７日間護摩の供養をもって８日の早朝に「蘇民将来之子孫也」の護符を笹野地区に頒布し現在に至っております。全国で蘇民祭として有名な所は、岩手黒石寺、笹野観音、栃木竹寺、長野八日堂、京都祇園社、尾張津島神社などがある。笹野では蘇民将来を一刀彫に表現し無病息災を祈り祀る神具として古来より伝えられ、笹野一刀彫の神と伝えます。笹野観音橋復元に当たり蘇民将来を擬宝珠として永く地域の発展と安全を祈るものであります。

平成元年１２月

観音橋復元協賛会

★橋は小さいが、擬宝珠は,蘇民将来のお守りの頭を模して角錐であった（写真参照)。

★蘇民が兄で善玉、将来が弟で悪玉となっているが、これでは蘇民将来之子孫也と悪玉

まで祟める理由が理解できない。蘇民将来、巨旦将来が誤って変形したのであろう。

★蘇民将来のお守り：

笹野観音堂は、千手千眼観世音菩薩をご本尊とする長命山幸徳院笹野寺という真言宗の寺院である。征夷大将軍坂上田村麻呂から始まる由来が伝えられている。その案内書の中の蘇民将来の項は、「蘇民将来が八角に削った木の上面に☆印を附した疫病除けの護符で、この地に疫病が無いのは古より毎年蘇民将来を彫刻するためと伝えられ、木を幾重にも削り込んだ笹野花と共に祭礼の縁起物として当地に伝えられてきた笹野彫の起源と思われます。」と記されている。1月１７日は十七堂祭り（笹野ゴリ）で柴燈護摩の祈祷が行われるが、そのとき彫物（蘇民将来）も頒布されるとのことであった。案内書から見るお守りは、白く塗られた八角形の頂上に赤に塗られた☆と縁取りがしてある。これは、黒石寺のパンフレット（蘇民将来 No.2 参照）の☆と同じで、金石文字の何かのまじないのようだ。８角柱の上部は蘇民将来・・・・（写真からは・は読めない）の文字とその下に朱色の飾りを付けた縦線が見える。上部と下部にくびれがあるかどうかは不明。在地の友人に正月の祭りに是非蘇民将来のお守りを手に入れてもらうよう頼んである。

1993/10/17　　西海英雄　DHG86015

後日、高さ 18.5cm の特製の蘇民将来のお守りを山形大学高橋幸司先生よりいただいた。
感謝。ビデオ出力参照。

4. 京都・祇園　八坂神社の蘇民将来守　　1993.10.

★蘇民将来守（ビデオ出力参照）

5cm の角柱の面を削り８角にし、高さ 8cm に切り上下を面取りしたお守りを八坂神社でいつでも手に入れることが出来る。角柱下方６cm は、鶯色と朱に交互に塗られ、朱部分に人(?)を象った象形文字が３箇所、残る１面に西の字のまん中の２本が突き抜けて長くした象形文字(?)が彫られている。角柱上方２cm に蘇民将来之子孫也と各面に１字づつ墨書されている。西の部分に也の字がかかっている。角柱の中心に穴を開け紐を通し吊り下げられるようになっている。紐の下端は瘤に丸めてあり、抜けないようになっている。そこに蘇民将来子孫也と印刷された長さ８cm、下端２cm で上に行くに従って細くなる２枚の和紙が風鈴の風受け紙ように瘤に括り付けられている。角柱の下面には、八坂神社と焼印が押してある。No.5 で述べるが、蘇民将来に出てくる８というキー・ナンバーは八坂神社を埋め込んだと考えられるが、このお守りの８cm がそれを意識したものかどうかは不明である。このお守りに付いていた案内を以下に記す。あとで述べるように八坂神社は蘇民将来の本家と考えられるが、この説明は凡庸に過ぎる感がある。

★京都・祇園　八坂神社の蘇民将来守について

奈良時代につくられた備後風土記に八坂神社の御祭神素盞嗚尊の御神徳が載っていますが、それによると、尊が南海に旅をされ、難儀をされた時、蘇民将来という方が、厚いおもてなしを申しあげたのを大そうおよろこびになり「蘇民将来之子孫也」と書いたお守りを腰につけていれば病にかからないとお教えになった。このような故事によって、昔から神社では木を八角に削り調製した蘇民将来守（そみんしょうらいのまもり）をお授けしています。これを氏子や崇敬者の方々は「ちまき」とともに、家の玄関に吊り又、床にかざって無事息災を祈っております。そして毎年新しいのと取り替えておられます。なお蘇民将来の命は四条通から石段を登り、西楼門を入ったところの疫神社にお祀りしてあります。　〒605 京都市東山区祇園町　八坂神社社務所　電(075)561-6155

・　1993/10/17　　西海英雄　DHG8601

★八坂神社＝蘇民将来の本家、外国人の拠り所（考察）
1993 年 10 月初め、京都八坂神社を訪れる機会を得た。ここで、蕪民将来の疑問に対する重要な答えを得ることができた。

★八坂神社は、外国人の社：四条通より鳥居をくぐると２つの小社が並んで迎える。左が疫神社（やくじんじゃ）、右が白鬚神社および、太田社である（写真参照）。疫神社は、蕪民将来を祀る。一名、蕪民将来社とも言う。私の説によれば、蕪民将来は外国人に対する特赦を表す。そして、白鬚神社は、百済の亡命者により崇拝された神社である。この２つの社の後方は大国主社と接しているが、これは、大和朝廷からは出雲地方は元々勢力圏でなかったので外国人と同じ扱いであったろう。３社とも異民族の社なのである。それが、神社の玄関に配置されている。もっとも、配置から行くと通用門かも知れないが、ある意志を持って存在していることが注目される。

★疫神社＝蘇民将来：疾疫祓徐の神として蕪民将来を祀る。一名、蕪民将来社とも言う。１月１９日の例祭には社頭に茅輪を設け粟餅を供え、祭後これを崇敬者に頒つ。また、７月３１日にも茅輪をかけ夏越祓いをし茅輪守を授与する。

★疫神祭：昔大神が南海に旅をされたとき、行き暮れて困窮し、一夜の宿を乞われたが、巨旦将来は裕福にもかかわらず宿を拒み、蘇民将来は貧窮していたが粟飯を炊き一夜のお宿をつとめた。大神はその志を嘉し、疫病流行の際は茅の輪を腰にし、蘇民将来之子孫也と称するものは悉く何を免れしめると仰せられた由緒により毎年１月１９日、７月３１日両日とも大きな茅の輪を設け、１月１９日には粟の餅を、７月３１日には茅の輪守を授けている。八坂神社のパンフレットに以上のように記されている。お守りに付いている説明（蕪民将来 No.4 参照）と基本的に同じことを述べている。

★八坂神社の創祀は、外国人：社伝によれば、八坂神社は斉明天皇２年（６５６）高麗より来朝した調進副使伊利之使主が新羅牛頭山の素盞嗚尊（スサノオノミコト）を山城国八坂郷に祀り、八坂造の姓を賜ったのに始まる。新撰姓氏録に八坂造は狛国万留川麻乃意利佐の子孫なりとある記録と合わせて、ほぼ妥当な創祀である。なお、創祀の地は、現在の社であり、当時霊地として信仰の対象であったことを思えば創祀は斉明以前をも想定し得る、と八坂神社由来略記（神社で頒布されている）に記してある。

★八坂神社で蕪民将来の話が作られた：この由来略記から、蕪民将来の話の大部分が理解できる。牛頭天王は新羅の牛頭山に由来するであろうし、笹野観音（蘇民将来 No.3 参照)で得た伝説の武塔の神が８年間南海へ行き、８人の子を得ると言う数字の八に因んだストーリーの展開は、八坂のアピールに違いない。

朝鮮半島（恐らく当時は文化レベルの高いと言った響きを持っていたであろう）から渡来した八坂氏が埋め込まれた蕪民将来の話は、庇護者の八坂造の勢力が及ぶ範囲 に流されたであろう。

それが、北は、黒石寺から点々と南の八坂まで伝わる蕃民将来 の話である。渡来人は、当時の最前線である関東や東北へと送られたので、八坂氏の 開拓した領地は大部分は北に限られたであろう。話の内容が蕃我氏滅亡で圧迫された 外国人の特赦であるかどうかは別として、蕃我氏滅亡後栄えた渡来有力部族が存在し 、これが蕃民将来の話を作ったか、すでに存在した話を修正したことは間違い無さそ うである。

そう考えると、蘇民将来のお守りは、８角形が基本であろう。八坂神社、笹野観音（蘇民将来 No.2、ビデオ出力参照)はこれに該当するが、黒石寺（蘇民将来 No.2、(写真参照）参照)、信濃国分寺 （蘇民将来［No.1 初めて投稿したので番号はないが]、ビデオ出力参照)は、該当しない。津島神社 は写真からは六角形風に見えるがはっきりしない。８角形は、蘇民将来は八坂神社だ けが関与しているのどうかを考える上で一つの種となろう。★祇園祭＝蘇民将来：有名な祇園祭りは清和天皇貞観１８年（８７７年）夏、疫病が流行したので、鉾６６本を建て御霊会を行い神輿を神泉苑に奉じ執行したのが起源とされている。祭は、神輿渡御と山鉾および花傘巡行とよりなる。このうち、神輿渡御は３基で素盞嗚尊（六角屋根)、櫛稲田姫命（四角屋根)、八柱御子神（八角屋根）からなる。

祇園祭は、疫神祭の拡大と見てよさそうである。八坂神社の基本は、蘇民将来に基づいていると云えよう。もちろん、神輿にもキー・ナンバーの８が現れている。私は見たことがないが、神輿の屋根は、他所で見られる蘇民将来のお守りの上部を想像させる。

★蘇民将来は疫免れだけなのか？：蘇民将来は、疾疫祓徐の神とされているが、何かカモフラージュされていないか？茅の輪が疫病免れの印とあるが、八坂造の朝廷への働きかけが功を奏して、蘇我氏滅亡後受けていた朝鮮系外国人への圧迫を特赦により解除出来たと考えてはどうか？特赦を受ける範囲が示されたであろうが、それが茅の輪と云った表現を取っているのかも知れない。特赦は一度だけで終ったが、八坂造は、これを神話化して利用することを思い立った。これが、疫病免れの神へとなったのではなかろうか。

★これまでの結論：上田の国分寺で見つけたエキゾチックな蕃民将来のお守りに魅せられたのが発端で、岩手水沢の黒石寺、米沢の笹野観音、尾張の津島神社と南に下がり、とうとう祇園祭の八坂神社へと達した。そして、蘇民将来のキー・ナンバーの８と、新羅の牛首から蘇民将来の話の発信源（の１つ）は渡来系の八坂神社に違いないと確信するに至った。問題は、蘇民将来の意味するところであるが、蘇我氏滅亡との関連であるのかどうかまでは、もっと時間と発見が必要である。しかし、時間的には、特に無理はないし、神話の組み立て過程も理解できる。まあ、可能性の一つとして、楽しく温めておきたい。

1993/10/17　　西海英雄　DHG86015

5. 下諏訪の津島神社と尾張国津島神社

★1993 年 10 月初め、結婚披露宴に出席するため長野県下諏訪を訪れた。諏訪神社については別に記すとして、案内地図を見ていて津島神社を見つけた。諏訪神社の社務所で聞くと、これは町内で祀っている小さな神社で、正月ごろ六角形だか、八角形のお守りを頒布しているとのこと。蘇民将来のお守りである。諏訪は、いろいろな勢力が重複している興味ある地であるが、ここにも朝鮮系の異民族が、７世紀にいたのだろうか。あるいは、そんなことの忘れ去られた後世に祀られたのであろうか。諏訪神社下社秋宮の近くには軽いハイキングコースがあるが、諏訪湖を見下ろす山の斜面に小さな祠があり、そこに津島神社があり、唐糸の供養碑のそばにも津島神社が祀られていた。まあ地の神様という感じで生活に密着しているようであった。

★諏訪から帰って､改めて愛知津島神社の蘇民将来玩具の説明書を読んだ(蘇民将来 No.1 参照)。それによると、津島神社と八坂神社は、二大天王社だそうである。このことは、朝鮮半島から渡来した部族は、八坂造ともう１つあったことを示している。同じ部族かも知れない。確かに、津島神社のお守りは８角形ではない。津島神社の所在地あるいは由来を教えていただけるとありがたいのですが。

★上田国分寺で得たお守りに引かれて、蘇民将来に興味を抱き、本フォーラムに初めて、今年の 1/24 にアップロードしたところ、八切止夫氏のこととか、蘇民将来のこととかいろいろとお教えいただくと同時に、蘇民将来の起源についてはわかっていないことを知った。先ずは、現地に行ってその痕跡を探してみようと考えた。そうなると 、不思議なもので、この 7 月から 10 月にかけて、黒石寺、笹野観音、八坂神社、それに 下諏訪の津島神社を訪れることがたまたま叶った。特に八坂神社では、大きな収穫が あった。

ひとまず、まとめてアップロードします。関連したことなどお教え下さい。

1993/10/17　西海英雄　DHG86015

#9599/9599　日本史ボード　　蘇民将来 No.2～6 のアップロードに対して
★タイトル (DQF36678)　93/10/18　 8:51 （11)
サロン】西海英雄さん貴重なレポートどうも［そんし］
★内容

『蘇民将来』のお話は、西海英雄さんが１月に書かれていらい、ずっと気になっていたテーマでした。偶然とはいえ、今回の実地レポートは蘇民将来が西海英雄さんを呼んでいるという形になっていたようですね。
じっくり再読させていただいて、後で話題に参加させていただきます。
今後ともどうぞよろしくです。

あ、それと、もう西海英雄さんは、常連仲間として私の頭にはインプット
されてますので【若葉】はいらないと思いますよ。

ＤＱＦ３６６７８：そんし

★タイトル (PQA43495)　93/10/18　23:26 （85)
民俗学】尾張国の津島神社について　影丸
★内容
どうも、西海さん、一月以来ですね。再会できて嬉しいです。
「愛知県（ですよね？）の津島神社の所在地・由来」をお求めのようですので、私の手許にある資料でよろしければ、どうぞ。
ただし「蘇民将来」やお守りについては、ふれてはおりませぬが‥‥
引用資料は以下のとおりです。

「県別シリーズ２１　郷土資料事典　愛知県・観光と旅」人文社　刊
ISBN3-7959-1023-5 C2525 P1236E
１９９０年３月　第二刷発行

同書によると、「津島神社」は、愛知県津島市神明町にあるそうです。
「津島市」は名古屋の西方に位置し、名古屋からは「名鉄津島線」に乗って、約３０分です。津島神社は、名鉄津島駅の西約２キロ、徒歩１５分ほどだそうです。
［じつは影丸は、この辺りの出身なのですが、「灯台もとくらし」もいいとこで、まだ、ちゃんと訪れたことがありません ^^;
****
＜歴史・祭礼など＞
欽明天皇元年（５３９）の創建と伝える古社で、古くは津島牛頭天王と称し、初め居守にあっ

たが、天暦二年（９４８）現在地に移ったという。弘仁元年（８１０）朝廷から正一位と日本総社の号を、正暦年間（９９０～９５）に天王社の号を賜ったという。古くから朝廷・武将の崇敬を集めたが、今も「津島の天王さま」の名で親しまれている。織田信長も厚く崇敬し、社殿を造営、また豊臣秀吉・徳川家康も厚く崇敬、尾張藩藩祖徳川義直は社領１、２９３石を寄進。

熱田神宮［名古屋市内］・真清田神社［愛知県一宮市］と当社を、尾張三大社として崇敬、毎年代参を派して御初穂を献じたという。

古くから疫病除けの守り神として知られ､関東地方･東北地方にわたって多数の分霊社がある。中世以後、神仏混淆になってから、牛王神宮寺を別当寺とし、実相院・明星院・宝寿院・観音坊などの諸坊をおいて隆昌を極めたが、明治維新の神仏分離で諸坊は廃された。明治初年県社に、大正１５年には国弊小社に列した。

約３万平方メートルの広い境内は、老樹がうっそうと茂り合って静まり、樹間に、国の重要文化財に指定されている本殿・楼門のほか、渡殿・祭文殿・回廊・拝殿・絵馬堂などが見え隠れして、古社らしい雰囲気をただよわせている。

社宝中、長光銘の剣、真守銘の太刀が、それぞれ国の重要文化財に指定されている。南門・鉄灯篭・石造狛犬・漆塗獅子頭・津島神社文書３、９９６点は県指定の文化財。境内のイチョウも「津島神社」のイチョウとして、県の指定天然記念物になっている。毎年七月第４土・日曜日に開かれる例祭は、国の重要無形民俗文化財に指定されている。他に七草祭（旧正月２～７日)、花の撓（４月８～１４日）など古式の神事が
伝えられている。

・祭神　　素戔嗚尊・大穴牟遅命
・重文　　本殿・楼門・剣銘長光・太刀真守

＜津島祭＞

津島神社の例祭で、毎年７月第４土・日曜日に行われる。

土曜日は宵祭で、山車を乗せた祭船５隻を天王川（昔は木曽川の支流、今は天王川公園内）に浮かべ、船ごとに高く灯をかかげ、津島笛の楽を奏しながら巡回する。

祭船は、船２隻を結び合せて山車を乗せ、その上に巻ワラを置き、これに竹竿に結んだ白張りのチョウチン３６５箇をかかげる。またその中心に如意と呼ぶ長い竿をたててチョウチン１２箇を点じる。勾欄の両側に１０箇ずつ、前後に５箇ずつ、計３０箇の絹灯篭を点じる。このほか、児船多数あって、槍・薙刀・長柄傘などを美しく飾りたてる。

日曜日の祭礼当日には、祭船の上段に屋台を設け、ここに能人形を置き、中断は色とりどりの布で飾られて鼓・笛の囃子が賑やかに奏じられるうちに車河戸を発する。
車河戸から船波止場につき、さらに船からおり、一同、神社に詣で、奏楽・酒宴のうち、ふたたび祭船に乗って車河戸に帰る。これが朝祭りで、古式豊かな、豪華絢爛な祭礼である。祭神に疫病・災難除けを祈る神事で５００年余の伝統をもち、京都の祇などとならんで、わが国三大夏祭の一つに数えられている。

この祭の起源は次のように伝えられている。

むかし、祭神の素戔嗚尊が西海よりこの地にいたった時、子供が籠の上に傘をたて、旗をつけ笛を吹いて遊んでいるのをみて尊が大変よろこばれた。のちにこれを摸して始めたのがこの祭礼という。

あるいは、人々が炎熱に苦しむのを神があわれみ、納涼の船遊びとして教えたのが、祭礼の起源ともいう。

****

また、（ＤＢ）広辞苑第四版には、

****

つしま - まつり【津島祭】

(1)津島市にある津島神社の祭礼。陰暦六月一四・一五両日に行われ、山車(ﾀﾞｼ)を船二艘連結した上にのせ、管弦の音勇ましく疫神を流すために天王川を漕ぎ下る。

→御葭(ﾐﾖｼ)の神事。

みよし - の - しんじ【御葭の神事】

愛知県津島神社で、葭に疫神を託して天王川(今は池)に流す神事。

****

とあるように、京の祇園会が陸上なら、この津島のそれは、水上。川遊び風の涼のとりかた。京も鴨川でやればよかったのに。。。

京も津島も、共に七月、昔ですからエアコンなんぞなかった蒸し暑い夏を迎えての「疫病祓い」に源を発する祭りのようですね。悪い事は水に流すに限るとか(^_^)

以上、とり急ぎレスまで。。。

６． 蘇民将来は、百済・高句麗滅亡で来日した難民の救済令か

百済最後の首都、扶餘（プヨ）を 1993 年 10 月末に訪れた。そこで、有名な白馬江に臨む百済の山城は、何と、扶蘇山城と呼ばれることを知った。扶蘇山寺と言うのもある。この蘇が、蘇民将来の先頭の１字ということも大きな可能性がある。 そのような観点から、つぎのストーリーが生まれる。

百済は、660 年(661 年?)に滅び、その復興をかけた戦いは、大和朝廷の肝入りにもかかわらず、663 年、白村江であえなく大敗し、多数の難民は日本へと押し寄せた。百済は、文化の先進国であったため、特に入国を拒否されることもなく受け入れられ、あるものは、貴族に取立てられ、あるものは、開拓民として東国に移住させられた。九州へも移住した（新聞記事資料添付）しかし、移住した彼らは、すでに居住している先住民から圧迫されることが多く、差別を受けることのないよう大和朝廷から伝えられた。これが、蘇民将来の始まりである。これは、既に私の述べた蘇我氏に関わった外国人救済令を百済からの難民外国人救済令に変えただけの違いである。年代的には矛盾はない。

本シリーズ No.5 の一部を再掲載する（誤り１点を修正）。

>★八坂神社は、外国人の社：四条通より鳥居をくぐると２つの小社が並んで迎える。
>左が疫神社（やくじんじゃ）、右が白鬚神社および、太田社である。疫神社は、蘇民
>将来を祀る。一名、蘇民将来社とも言う。私の説によれば、蘇民将来は外国人に対す
>る特赦を表す。そして、白鬚神社は、百済(誤り。高句麗が正しい)　の亡命者により
>崇拝された神社である。この２つの社の後方は大国主社と接しているが、これは、大和
>朝廷からは出雲地方は元々勢力圏でなかったので外国人と同じ扱いであったろう。３
>社とも異民族の社なのである。
>★八坂神社の創祀は、外国人：社伝によれば、八坂神社は斉明天皇２年（６５６）高
>麗より来朝した調進副使伊利之使主が新羅牛頭山の素盞嗚尊（スサノオノミコト）を
>山城国八坂郷に祀り、八坂造の姓を賜ったのに始まる。新撰姓氏録に八坂造は狛国万
>留川麻乃意利佐の子孫なりとある記録と合わせて、ほぼ妥当な創祀である。なお、創
>祀の地は、現在の社であり、当時霊地として信仰の対象であったことを思えば創祀は
>斉明以前をも想定し得る、と八坂神社由来略記（神社で頒布されている）に記してあ
>る。

八坂神社の疫神社(蘇民将来)と太田社(白鬚神社)が同じ規模で並んでいるのは、唐と新羅の連合軍による侵略された百済難民(660 年滅亡)と高句麗難民(668 年滅亡)の同じ時期の同じ原因による同じ被害者意識を反映していると解釈できる。隣り合わせている大国主社は、朝鮮半島から絶え間無く来訪、移住していた同じ人々と共通項で括ることが出来る。そう考えると蘇民将来の蘇とは、百済からの渡来人ばかりでなく、百済、高句麗難民の総称、さらにはこの時期の朝鮮半島からの難民の総称であったかも知れない。

そう考えると、八坂神社の、というより渡来豪族八坂造の性格がはっきりして来る。
渡来外国人(難民)を受け入れ、関東地方や東北地方の最前線へ送る機能を果たしていたのである。

《付録》なお、韓国に行って、会う人（ガイドや理工系学者）に八坂神社を創祀した八坂造の生国の痕跡を知りたくて、次のようなことを聞いてみた。(1) ハッピーナンバー(2) 牛首 (3) 蘇民

将来ハッピーナンバーについては、ソウル在住の人は、 7,慶州側の人は、3,9 で 8 もそうだ、とついでに述べてくれた。(2),(3) については全く反応はなかった。この点については、全く得る所はなかった。

7. 環日本海文化圏と八坂神社　1994/01/31

「歴史Ｅｙｅ」'93 １０月号 p.38-42（日本文芸社）に小林久三氏による「海を渡ってきた異色民族、粛慎（みしはせ)、靺鞨（まっかつ)、狄（てき)」と題する読み物がある（資料として巻末に収納。さらに、古代史】＜八切＞「日本意外史」エビスとは何なのか　影丸も参考資料として収納)。

山形県小国町の古志（こし）王神社は、古代に中国北部から沿海州にすんでいたツングース系の民族が移動し、北海道から本州の日本海側一帯にかけて渡来により建立されたと言われる社である。彼らは、祖先の霊をあがめてその姿を石に彫って持ち歩いたという。

●蘇民将来の御守りはそれに関係があるかもしれないと私は考えている。古志　社は新潟の新発田市にもあり、この神社に赤土を塗ってそれを体に塗り付ける　と冬あかぎれにならないという。上田の八日堂、八坂神社の蘇民将来の御守り　に朱が使われているのはこれを反映しているのかもしれない。

古志国は、飛鳥時代に見える国名で、越国あるいは高志とも書いた。越国はいまの新潟県から福井県北部までさした。三国、高志、深志といった国造が支配していた。

●そういえば、松本に信濃の名門、「松本深志高校」が、あるがこれはそのなごりであ　ろうか。大化改新になって越国に統一され、その後、山形、秋田を含む出羽地方から、さらに青森の津軽地方までも越国と称するようになった時期もある。だが、７世紀の天武、持統天皇のあたりから、越前、越中、越後と３分された。日本書紀には越の州（こしのしま）と表記されている。この地域は、大和朝廷とは異質の独立性の高い地域であったのであろう。

●諏訪神社は、４カ所に分かれて存在する鎮座する独特の形で有名である。御祭神は建　御名方神（たけみなかたのかみ）で大国主命の子神と言う。私の訪れた下社秋宮の子安　社は、お諏訪様の母神である高志沼河比売命（こしのぬなかわひめのみこと）を祀ると　いう（写真参照)。この神の本社は新潟県糸魚川の奴奈川神社である。主神の母にして　しまうなど大和朝廷がこの地方を侵略した後の懐柔策が見えるようではないか。ともか　く、諏訪、松本あたりまで彼らの勢力範囲であったことは間違いなさそうである。

粛慎は７世紀の随、唐時代に満州地方に居住する民族を総称した呼び方で、日本の資料もこれを用いている。ツングース族と言うことであろう。日本書紀では阿倍比羅夫が水軍を率いて３年間に３回も北行し、「蝦夷を討つ、粛慎国を討つ」とある。６６０年, 比羅夫は軍船２００隻を率いて粛慎を討った。彼らは、騎馬民族であると同時に、採鉱、採金の技術にも優れ、一時期は常陸の鹿島まで進出た。やがて追われたが、これと奥州藤原氏との連関が考えられている。

６６３年、新羅が百済を、さらに６６８年、高句麗を滅ぼすことによって粛慎の子孫の靺鞨と呼ぶ民族が、中国東北部に逃れ、黒水靺鞨族を除いた全靺鞨族を統一し、７世紀末に渤海国をつくった。もちろん、一部は、日本にも逃れたであろう。彼らにとっては、日本海は庭のような存在であった。日本書紀によると、高句麗の最初の使者は、しばしば「越の岸」に来たとあり、そ

の後も高句麗の使者は、しばしば越の海岸にやってきた。渤海使節の到着地も北陸を中心とする日本海岸であった。続日本紀には、越後に狄（てき）という民族が反乱を起こす話がでているが、これは高句麗からの亡命者してきた靺鞨族の一部でなかったか。それも大和朝廷が渤海と平和条約を結ぶとおとなしくなった。渤海が、越の海とつないだ海上路は、北路、または日本道とも呼ばれた。

これが、上記の記事の抜粋である。●は、私が、つけ加えた部分である。これに、八坂神社を中心とする蘇民将来の流れを重ねると興味深い結果が得られる。なぜ、蘇民将来を奉ずる寺社は、日本の主脈の山の中にのみ見いだされるのであろうか。なぜ、海岸に、平野に無いのであろうか。私の推測では、少なくとも７世紀の始めには、朝鮮半島からの人々は、陸軍は八坂神社、海軍は津島神社に領地を与えられた。どういう事があってそうなったか事の原因は、はっきりとはしない。ただ、かなりの数に及んだであろう。それを知ることは、大変興味あることではあるが、ここでは、その探求はひとまず措こう。もちろん、百済滅亡以降ならば理解できるが、八坂神社の縁起からすれば、それ以前の事である。深い関連はあったと考える方が理解は、し易いが。結局は、八坂造が勢力を伸ばすことになった。百済も高句麗も滅び、亡命者は後を絶たなかった。北へ北へと勢力を伸ばした。しかし、すでに同族の入った日本海側に侵略することは得策でなく、むしろ縁者である彼らの力を借り太平洋岸を支配する蝦夷との境界に力を伸ばしていった。それが脊梁山脈に蘇民将来が存在している理由なのかもしれない。

結論から言えば、八坂造は、百済、高句麗からの亡命者を積極的に受け入れることによって自らの勢力を飛躍的に伸ばした。高句麗の支配者は、中国東北部の出身であり、百済もそうである。そして、本州の日本海側にいる人々もそれに深い関連を持っているのである。鳥取、島根の大国主命の国譲りの伝説からも明らかなように大和朝廷とは相入れなかった異民族であり、ツングース族である。八坂神社には、蘇民将来社（百済？）、白髭神社（高句麗）、そして大国主命（日本海沿岸の山陰地方）が同じところに祀られている。八坂神社に祀られているのは同族の、すなわちツングース族を主体とする渡来人なのである。八坂造は、民族移動の交通整理を行ったのだ。渤海が、北からの流れとすれば、八坂造は南からの流れを作り出した。両者の交差するところには、すでに古くから同族が居着いていた。ツングース族の環日本海文化圏は、大和朝廷の中枢に力を持つ八坂造（八坂神社）が、日本総代理店といった役割を受け持っていたのではなかろうか。

笹野観音での伝説で武塔の神が北から南へ行く話があるが、我々の常識では、民族移動は常に南から北というのが定説（？）のような気がしていた。しかし、こういったスケールのなかからは、この伝説も特に驚くには至らない話ではあろう。

では、鍵を握る八坂造はどうなったのであろうか。権力者が滅びてもなぜ神社は生き延びたのであろうか。まだ、環日本海文化圏はその名残をどこかに残しているのだろうか。蘇民将来のお守りが意味するところを解明することは、７ー８世紀の古代日本を知る上で興味は尽きない。